マーシャル方面遺族会
（旧クェゼリン方面戦歿者遺族会）
〒103　東京都中央区
日本橋人形町1—8—2
電話 03—3661—8760
FAX 03—3661—6241
振替東京 00100-0-93487
編集兼発行人　佐藤宗丕

第五三一海軍航空隊慰霊碑
所在　呉市 呉海軍墓地
題字　元第五三一海軍航空隊司令
佐々本健爾謹書
〈14頁参照〉

平成八年度
慰霊祭 総会 直会の御案内

会長　佐藤宗丕

会員並びに会友の皆様にはお健やかに新しい年をお迎えのこととお慶び申しあげます。

恒例の慰霊祭、総会、直会を次の通り行いますのでお知り合いの方々をお誘い合せ、お身内の皆様ともども賑々しく御参集下さい。

日　時　平成八年三月三十一日（日）
午前九時集合　靖國神社参集所前

慰霊祭　午前十時　御本殿

定期総会　午前十一時　靖國会館二階
議　題　諸報告・会務計画・予算・その他

直　会　総会終了後（凡そ十二時頃）靖國会館二階で開催します。四時閉会の予定。

◎出欠は同封のはがきで、出欠に拘わらず全欄に記入し、二月末迄に到着するよう御投函下さい。
会員名簿訂正に係る事項は特に正確に。
◎直会に参加される方は同封のはがきにその旨を記入し一人三〇〇〇円を郵便振替でお振り込み下さい。
◎九段会館に宿泊を希望される方は、同封のはがきの所定欄に記入し、料金一人八、二四〇円（一泊二食付）を本部にお振り込み下さい。
申込み後の変更や取り消しはすぐに左記に電話し、本会にもその旨をお知らせ下さい。

（以下16頁へ）

目次

平成八年度 慰霊祭 総会 直会の御案内　会長 佐藤 宗丕……1
終戦五十年の両陛下 戦没者慰霊の大御心……2
第七五二海軍航空隊の航跡……橋本 岩樹……3
文献の御寄贈……5
遺品……北原ひで子……6
戦地からの便り……中村 順子……6
仕合わせ……斎田ヨシエ……7
お便りの中から……7
井上 ソヨ　徳原 勇
ホール 秋　芳賀タツエ
蓮沼 常子　近藤キクエ
藤田 清瀬　星野 綾子
お元気ですか?……9
豊谷美恵子　日向野キク
相川 孝夫　佐保 明
伊勢 照男　川名 博夫
齋藤耕太郎　柴田 貞子
斎田ヨシエ　園山 和子
自歌自註「南十字星」……鎌田いね子……12
認識票 遺族へ……豊谷美恵子……12
靖國神社だより……13
第五三一海軍航空隊慰霊碑について……篠崎 英夫……14
寄付者芳名……14
新刊本の紹介……14
環礁「ミレー抄」(20)……成宮芳三郎……14
「南十字星」刊行……15
名簿訂正(9)……15
訂正……16
本部だより……16

終戦五十年の両陛下

戦没者慰霊の大御心

七十七年ぶりの宸筆の御製

平成七年八月十五日、日本武道館での政府主催の全国戦没者追悼式に参列した遺族に二枚の色紙が手渡された。天皇、皇后両陛下が日本遺族会（橋本龍太郎会長）に「戦後五十年遺族の上を思ひてよめる」と題しお寄せになった御製、御歌である。

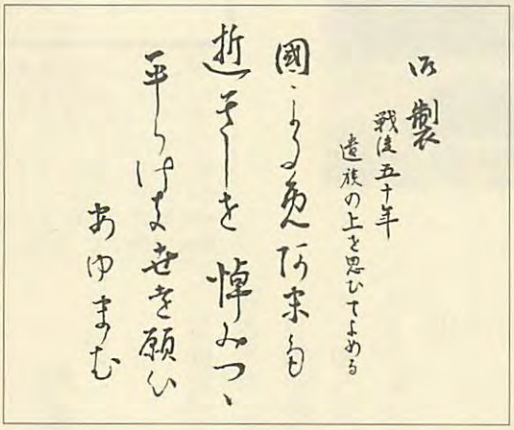
御　製

國がため
　あまた逝きしを悼みつつ
平らけき世を願ひ
　あゆまむ

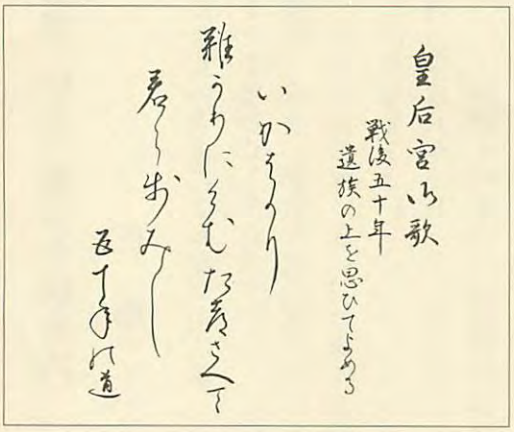
皇后宮御歌

いかばかり
　難かりにけむたづさへて
君ら歩みし
　五十年の道

日本遺族会の末廣榮副会長は、「終戦五十周年を迎え、戦没者遺族にとりまして意義深い年に両陛下には私共の願いをお受けとめいただき、また、それが宸筆、御染筆であり、宸筆を一般に下賜されたのは大正七年以来、実に七十七年ぶりのことでありました。また皇后様から遺族会への御歌ははじめての下賜でありました。天皇陛下は戦没者へ、皇后陛下は遺族の五十年の歩みへ、御心をお寄せいただき、おなぐさめいただきました。この感激を全国の遺族に分かとうと、全国戦没者追悼式に参列した遺族にはその御製と御歌の色紙を、山本悟侍従長と井上和子女官長にそれぞれ御製、御歌を写していただいたものをお配り致しました」と感激を語った。



御　製　山本侍従長謹書



皇后宮御歌　井上女官長謹書

英霊と遺族の気持ちを温かく抱かれて

天皇陛下は昨年末、戦後五十年を迎えるにあたって「来年は戦争が終わって五十年になります。戦争による多くの犠牲者とその遺族のことは少しも念頭を離れることはなく、今後もその人々のことを思いつつ平和を願い続けていくつもりです」とお述べになった。

その御心のまま御出立になられたのが、七月末から八月はじめにかけての長崎、広島、沖縄、東京（墨田区）への「慰霊の旅」であった。慰霊を目的としたこの旅の行幸啓は遺族の間に深い感動を呼び起こした。

長崎、広島では両陛下をお迎えした被爆者がハンカチで目をぬぐう姿が多くみられた。ことにお年寄りたちの感動は大きかった。長崎の原爆ホームでは九十歳のご婦人が皇后陛下に不自由になった足をさすっていただき、感激。また、八十七歳のご婦人は「『体に気をつけて長生きしてください』とお言葉をかけられ涙がぽろぽろ流れました」と語った。広島の原爆養護ホームでは九十六歳のご婦人が、皇后陛下にお言葉をいただき、「感激です。長生きできて、幸せです」と語り、八十二歳のご婦人も「手を固く握ってくださった」と涙にむせんだ。長崎原爆被災者協議会の会長は、「われわれの気持ちが伝わったように感じた」と語り、長崎原爆遺族会の会長も、「遺族の痛みに共感いただいている」と。また、沖縄の反基地運動の元リーダーも「両陛下の訪問は素直に受け止めています」と感慨深く語った。

昭和天皇の御心を継承されて

陛下は「慰霊の旅」を終えられて、「これら四地域にとどまらず、広く日本各地、また、遠い異郷にあって、この戦いによりかけがえのない命を失った多くの人々と、今なお癒えることのない悲しみをもつ遺族の上に深く思い

を致します」とご感想をお述べになられた。終戦五十年に際してのこの度の行幸啓はすべての戦没者と遺族への深いおぼしめしを象徴するものであった。

それはまた昭和二十年三月十八日に東京大空襲の被災地を視察された昭和天皇の御製

戦のわざはひうけし
　国民を
おもふ心に
　いでたちて来ぬ

の御心そのままと拝された。

両陛下は、終戦五十年に当たる本年の年頭ご発表の御製・御歌に、昨年二月、約二万名の将兵が戦死し、今なお一万余の遺骨が収集されていない硫黄島に行幸啓になられた折りの歌をお詠みになられた。

御　製

硫黄島（二首）

精根を込め戦ひし
　人未だ
地下に眠りて
　島は悲しき

戦火に焼かれし島に
　五十年も
主なき莵麻は
　生ひ茂りゐぬ

御　歌

慰霊碑に詣づ

慰霊地は今安らかに
　水をたたふ
如何ばかり君ら
　水を欲りけむ

また、今上陛下には終戦五十年にあたり、各都道府県の護国神社五十二社の終戦五十年臨時大祭斎行に際し、幣帛料を御奉納された。

昭和天皇は晩年、「八月十五日」と題した次の御製をお詠みになられた。

この年のこの日にもまた
　靖國の
みやしろのことに
　うれひはふかし
（昭和六十一年）

やすらけき世を祈りしも
　いまだならず
くやしくもあるか
　きざしみゆれど
（昭和六十三年）

数々の御製、御歌を拝する毎に思うのは、戦没者並びに国民に対する大御心の忝さである。

（「日本の息吹」九月号より抄録）

第七五二海軍航空隊の航跡

会友　橋本岩樹

はじめに

開戦以来苦楽を共にした多くの戦友がルオットで、飛ぶ飛行機がなくなり、無念の思いで戦死し、当時の七五二空の状況を知る人が少なくなった現在、ありし日の七五二空について記してみる。後で述べるように、搭乗員救出のため夜間トラック島より来た飛行艇に乗る為ドラム缶で作った筏で沖合まで行く時、潮水を被り読めなくなった処もある日記が今も手許にあるので之を元に書き記す事とした。

わが国と米国の関係が極度に険悪になってきた昭和十六年四月、鹿屋基地で編成された第一航空隊（司令荒木敬吉大佐）は、航空隊の名称変更により、十七年十月に七五二航空隊と改称された。開隊時の編成は九六式陸上攻撃機二十七機と九六式艦上戦闘機十八機であった。

私は十六年四月から十九年五月迄七五二空に勤務し、四代の司令につかえ尊敬する上司の下で懸命に働き、青春を燃焼させた。三代目司令園山　斉大佐（会員園山和子さんの御夫君）以下多くの隊員がルオットで玉砕された後は豊橋で七五二空の再建にあたった。

全期間を通じて特に印象の深い上司は飛行隊長野中五郎大尉（後大佐）、分隊長伊藤福三郎大尉（後少佐）などである。

七五二空は開隊早々南方に進出して基地を移動しながら飛行場の整備状況の調査や目標のない洋上を飛行してケシ粒のような島に帰る洋上飛行訓練を行い、七月に鹿屋帰着、ついで漢口に進出して支那の奥地攻撃、九月に鹿屋帰着、十月に海南島の海口に移動、訓練と南支作戦にあたった。十一月に台湾の台南に移動して以後、比島、ケンダリー、アンボン、ラバウル、マーシャルと転戦し、ラバウルとマーシャルには各二回の作戦に参加した。この間ジャバ沖で、米、蘭の艦隊を爆撃したり、チモール島クーパンに落下傘部隊を降下させたりした。

十七年十二月、一年余の外地勤務から木更津に帰り、搭乗員の補充交替があり、雷、爆撃の訓練に明け暮れた。機種もなじみ深い九六式陸攻から一段と性能の良い一式陸攻に乗替えた。

アッツ島作戦

十八年五月十二日、軍令部からの電話で、米軍のアッツ島来攻を知らされ、

急遽北千島の幌筵基地に進出することになった。折柄半舷外出中の隊員を警急呼集で帰隊させ、同夜中に進出準備を終え翌日には司令以下二個中隊二十四機が基地移動に必要な要員、物資のほか幌筵には魚雷がないので魚雷を抱いて離陸した。通常の攻撃荷重を超えた超過荷重で、二千七百粁を一と飛びに幌筵に着き、翌日から攻撃待機に入った。

間髪を入れない迅速果敢な行動は、基地機動力としての中攻隊の本領を余すところなく発揮したもので、隊員の練度の高い証拠であった。残念なことに雪と霧に阻まれて、出撃できたのはたった二回だけになった。五月二十九日、米軍の猛攻をうけたアッツ島の山崎部隊長以下約二千五百名の守備隊は、開戦後最初の玉砕部隊となったのである。

ラバウル派遣隊

十八年七月になって、ラバウル中攻隊の消耗が大きくなり、千歳基地の二個中隊が同方面に派遣され、所在の七〇二空、七〇五空、七五一空と協力して作戦にあたった。

八月十五日、わが索敵機はガッカイ島沖で巡洋艦、駆逐艦に護衛された敵の輸送船団を発見。野中飛行隊長の率いる七五二空の雷撃隊一個中隊七機が攻撃に向かった。予定地点に到達したが敵を発見できず、索敵開始後約三十分で満月の海面に大船団を発見、恨み重なる敵に一撃を加えた。この夜の戦果は巡洋艦、輸送船合わせて撃沈四隻、不確実一隻、わが損害は軽傷者二名、被弾四機のうち不時着した一機は搭乗員を収容した。快心の一撃であった。

九月、ラバウル派遣隊は千歳基地に帰り、歴戦隊員の転出、戦地未経験者の転入により副操を主操に、電信員を偵察員に配置変更と、之に伴う徹底した猛訓練が行われた。

ギルバートとマーシャルの戦闘

十八年十一月十九日、米機動部隊は早朝からギルバート諸島に猛烈な砲爆撃を加え、二十一日からタラワ、マキンに上陸を開始した。

迎え討った第三特別根拠地隊柴崎恵次司令官（会員柴崎晃さんの御父君）以下の守備部隊約五千三百名は勇戦奮闘の末十一月二十五日遂に全員玉砕した。

千歳基地で訓練中の七五二空主力は、聯合艦隊命令により急遽マーシャル諸島に進出することになった。二十四日、二十五日の両日にわたってルオット基地に到着し、二二航空戦隊吉良俊一司令官の指揮下に入り決戦態勢をとった。古強者は雷撃隊としてルオットに、若手搭乗員は索敵隊としてマロエラップに配備された。雷撃隊は第二次ギルバート沖航空戦以後数次の夜間爆撃に参加して、空母六隻、巡洋艦二隻に魚雷を命中させ、内数隻を抹殺した。

援護の戦闘機もなく、防御性能の弱い陸攻（一式ライターの悪名があった）で、厳重に守られた敵に近接するために、敵空母群の二百粁手前から高度二十米以下の超低空で海面を這い、レーダーに発見されることなく敵を急襲し、しかも雷撃終了後は各機単独で暗夜目標もなく、現在のような無線航法装置もない千二百粁の洋上を確実にルオットに帰着し得たことは七五二空の術力の高さを明瞭に証明している。

若手搭乗員の私は索敵隊として殆ど毎日ギルバート方向千二百粁南方に出て、左に六十粁飛んで帰途についた。所要時間は約八時間であった。

僚機の中には行動中に無線で、暗号「ヒ」を連送（我、敵戦闘機と交戦中）したまま帰って来ない機もあったが、そのうち敵戦闘機が、ギルバートから北上してミレ島付近で待伏せし、レーダーで僚機を捕捉していることが分かり、超低空で索敵するように改めてから被害は極度に少なくなった。

ある時巨大な波のうねりをプロペラで叩いて危うく命を落しかけたこともあった。

十一月二十八日、マーシャル方面航空部隊の配備が二二航戦から二四航戦に変更された。

十二月一日朝、ルオット基地で第一線戦場には珍しい総員集合があり、永野軍令部総長からの電報を園山司令が荘重に読み上げられた。

「本職十一月三十日、軍状奏上に及びたるところ、陛下にはしばし本職に椅子を賜い、累次にわたる聯合艦隊航空部隊勇戦の状況を聴し召され深く御嘉賞あらせられたり」。

光栄と感動の一瞬である。しかし、この四日間に歴戦の搭乗員八十九名が散華され、見なれた顔を再び見ることができない。戦場の常とは云え淋しい限りである。

私は十二月二日に敵機動部隊を発見し、園山司令に報告した後、伊藤分隊長同道で山田道行二四航戦司令官（会員山田雪子さんの御父君）にも報告した。山田司令官とは昭和十五年鈴鹿空卒業以来の対面であった。幕僚は先任参謀井上梅二郎中佐（会員井上賀雄さんの御父君）航空参謀鍋田美吉少佐、整備参謀樺山末雄少佐（会員川越コウさんの御夫君）であった。

昭和十九年一月十二日から、兵舎が夜間爆撃の目標にされたので、飛行場の搭乗員待機所で寝るようになった。十四日に、敵空母群が基地北方に居るらしいとの情報で偵察したが発見できなかった。

一月二十七日、私は病気療養のためブラウン基地に移された。

一月三十日早朝、米大機動部隊はマーシャル諸島全域に熾烈極まる攻撃を開始、特に上陸を企図したクェゼリンとルオットの事前攻撃にはタラワの戦訓によりその五倍の猛烈な砲爆撃を行った。

クェゼリンの総指揮官は第六根拠地隊秋山門造司令官（会員石川正興さんの御父君）で、守備部隊は海軍約五千名、陸軍約千二十名であった。

ルオットの総指揮官は第二四航空戦隊山田司令官で、航空兵力は、二五二空、二八一空、七五二空、七五三空、七五五空の合計千五百名、地上兵力は、第六一警備隊の分遣隊約四百名のほか第四施設部関係者など約千二十名の総計約二千九百二十名であった。

一月三十日から始まった米軍の砲爆撃によってルオットのわが飛行機八十三機は全部撃破され、貯蔵してあった魚雷、爆弾、燃料等の全部を焼失し、三十一日〇六三〇通信が途絶した。

二月二日、米軍は約六百噸の爆弾と五千発以上の砲弾をルオットに打込み、上陸を開始した。わが守備隊は連日の砲爆撃で殆ど死傷し、生き残っていた者は少数部隊に分かれて二月三日最後の突撃を敢行し全員壮絶な玉砕を遂げた。

一月三十日早朝、ブラウンからルオットに向かった中攻八機は敵機に捕捉され着陸前に全機撃墜された。

マロエラップから索敵に出た一機がブラウンに帰った以外の七五二空の飛行機は全部姿を消した。

クェゼリンでも一月三十日以来の砲爆撃により地上の陣地、施設はすべて破壊され、二日に上陸してきた米軍と死闘をくり返したが、衆寡敵せず二月五日遂に全員玉砕の已むなきに至った。この戦闘で六根参謀音羽正彦侯爵（本会の大給湛子相談役の御令兄）も運命を共にされた。

米機動部隊により殆ど潰滅状態になったわが航空部隊再建のため、聯合艦隊長官は、マーシャル方面に残留する搭乗員の収容を下令した。

空も海も敵の厳重な監視の中を夜間密かに敢行された決死的救出作業によって、マロエラップ、ウオッゼ、ブラウンから約二百五十名を、ミレー、ナウルから約百名を収容した。このうち七五二空の隊員は、マロエラップの索敵隊搭乗員と、前夜攻撃に出てブラウンに着陸した雷撃隊員の合計七十二名であった。

マロエラップ基地で、緊急に収容される搭乗員を見送った松永光男整曹長（後中尉）は同島に残って終戦まで米軍機の攻撃に耐えぬいたがこの間、二十粍機銃で敵機八機を撃墜している。

搭乗員だけが救出されたのは、搭乗員の養成に長い期間と膨大な経費がかかり戦力維持の強い要請からであった。

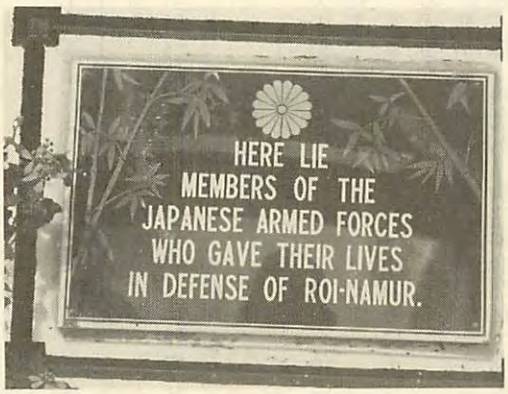
タラワ、マキンに続いてクェゼリン、ルオットを手中にした米機動部隊は、二月十七日、十八日の両日トラックを急襲してわれに甚大な損害を与えた。また、ブラウン環礁の各島に徹底的砲爆撃の後、十九日から上陸をはじめた。守備部隊の海上機動第一旅団（西田旅団長以下三千五百六十名）は、勇戦奮闘も及ばず二十三日までに全員玉砕し、ギルバート、マーシャルの主要基地はすべて敵手に陥ちた。

航空部隊の損耗激化に伴い、七〇三空（千歳空）、七〇七空（木更津空）、七〇二空（四空）の各隊は名を消したが歴戦の七五二空を消滅させるのは惜しいと考えられたのか、永石大佐を四代目司令として豊橋基地において残存の七十名を基幹にして再建されたものの、その後のマリアナ攻防戦や台湾沖航空戦、神雷部隊の特攻隊として殆ど戦死し、生還者は僅か四名とのことである。

名飛行隊長野中少佐は、二十年三月二十一日、第一神風桜花特別攻撃隊神雷攻撃隊指揮官として「今日は湊川だよ」の一言を残して米五八機動部隊へ体当り攻撃をかけたが無念なるかな圧倒的多数の敵機の邀撃に遮られ敵艦隊を見ることなく全機未帰還となり、作戦に参加した全員が二階級特進せられた。

以上、力不足のため意をつくせず、消化不良の状態かと慚愧に堪えません。祖国と同胞の安泰を念じつつ南海に散華された先輩、同僚の御霊安かれとお祈りいたします。

（昭和十三年海軍入籍・飛曹長）



米軍が建立し管理しているルオット（ロイ・ナムル）の墓碑
碑銘「ロイ・ナムル島の防衛のため自らの生命を捧げた日本の勇士ここに眠る」

文献の御寄贈

第七五二海軍航空隊と海軍中型攻撃機に関連の深い文献が寄贈されました。
①防衛庁戦史室著「戦史叢書第六巻」
②中攻会編「海軍中攻史話集」
③中攻会編「中攻とともに戦後五十年」
④巌谷二三男著「中攻」海軍中型攻撃機

寄贈者は、①浮田名誉会長夫人桜代様　②会友橋本岩樹様　③中攻会　④故伊藤福三郎殿夫人政枝様の皆様です。

④は、伊藤様の部下であった橋本様の懇請により応諾頂いたものです。

何れも市販されていない貴重な文献ですから大切に保管いたします。

閲覧を希望される方は本部にお申込みください。

遺品

埼玉県　北原　ひで子

昭和二十一年、私が満洲から引揚げた前年、ウオッゼ島の夫の戦友荻原晃様が生家を訪れてくださいました。

聞くところによりますと、荻原様は夫の最後のことなど、こまごまと親兄姉に話されたとのことでした。公報によれば死亡年月日は十九年九月十六日になっておりますが、当時は連日連夜爆撃が激しく直撃弾であったとのことでした。

夫の遺骨の一部が丁寧に箱に収められていて、その当時夫が身につけていた時計、万年筆、お守り、ハンカチなどが遺品として届けられておりました。この時は一片の骨となった夫に再会することができて、只々感慨無量でした。

万年筆はすっかり錆びついており、腕時計はガラスも針も吹飛んで、文字盤だけが革紐にかろうじてくっついていました。どの品も遠く故郷を離れ、持ち主と共に日夜を過ごしたものばかり。この時計と毎日を生き続け、この万年筆で満洲に残された私に、手紙を書き続けたことを思いつつ、しみじみと手にとったのでした。中でも黄ばみ、茶色がかったハンカチは門出の朝、数枚一緒に手渡した中の一枚でした。

戦地の水を幾度くぐったであろうか、遠い遠いウオッゼ島から戦友の手で持ち帰られ、子供と共に無事引揚げることができた私の掌に再び戻ってきたハンカチの旅を思うと切ない思いでした。

この遺品はそれぞれ親兄姉に頒けられて、ハンカチだけ私が頂くことになりました。その後、両親が相次いで世を去り、あの遺品の行方は分からなくなってしまい、返すがえすも残念に思っています。

人のつながりとは何ともろく、また強いものであろうかと思われます。

戦死せる夫が望郷の歌うたいしか
ウオッゼ島の浜に佇む
この海もこの環礁も戦いの
跡かたもなくみ霊は眠る
マーシャルの小島の椰子吹く風の音
夫も聞きしか戦の夜を
夫の霊宿るかと思いウオッゼの
摘みし押し花色褪せにけり
検閲の「吉岡」の印くっきりと
夫の戦地の手紙も古りぬ
征く夫が祈りし社の八重桜
五十年経て花は変わらず
戦いに敗れし夏を子を負いて
渡りし河よいま凍れるか
マーシャルのウオッゼ島に果てしこと墓に刻めり後の世のため

戦地からの便り

東京都　中村　順子

佃　喜美様のお世話で、この会に入れて頂き、おかげさまで平成四年の厚生省主催の現地慰霊巡拝に参加させて頂き、更に平成六年の本会主催の五十年祭現地慰霊には、夫と共に参加することができて、亡き父との距離がぐっと近くなった思いがいたします。

父は、私が三歳のとき戦死しました。父の形見は、黒竜江省の孫呉から母に宛てた次のはがき一枚だけです。

写真でしか知らない父を身近に感じる大事な、大事なはがきです。

（発信者　中村静夫、明治四十三年生れ、海上機動第一旅団司令部付十九年二月二十四日　ブラウンで玉砕）

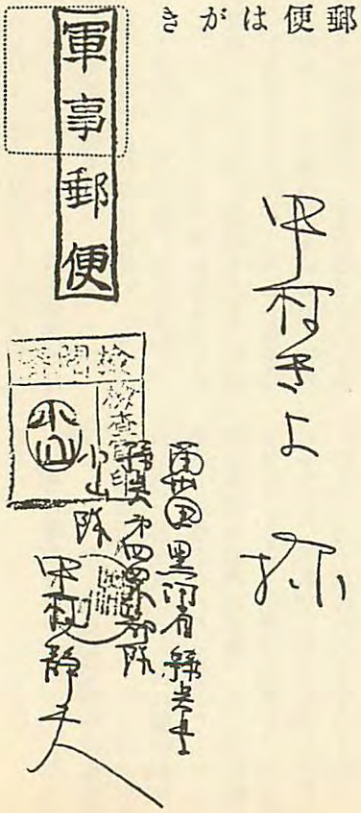
前略、四月二日付小包及五月四日付ハガキ本日受取ました。順子の写真は一昨日受取りました。焼海苔、安全剃刀有難う御座いました、海苔の缶はつぶれてゐました、それでも美味しく戴きました。ハガキに依ると又小包を送って下さった由、有難う御座ゐます。

佐藤良吉、帰還した由、新？に居る時、写真を送って貰ひまして私も送ろうと思ひましたが、送る時期がなくなりました。宜しく云って下さい。尚美堂へ入る様な話でしたとの事、萬事なる様になる事ですね。扨て今日は休みで五月と云ふのに朝から雪がチラ〳〵吹ぶいてゐます、温度も下り今日から三寒に入り二、三日肌寒い、二月下旬位の寒さが続く事でせう。

順子は随分大きくなりましたね、座ってゐる處、立ってゐる處、後を向いてゐる處、皆可愛いポーズです、順子の近影に接し其の日〳〵が楽しみです。

伊藤さんに宜しく。では又後便で

郵便はがき



仕合わせ

新潟県　斎田　ヨシヱ

兄はクェゼリン島で玉砕いたしましたが、その前は旧満洲のハルビンの軍隊に勤務しました。結婚適齢期が戦中でしたため、遂に未婚のまま戦死いたしましたので、私はハルビンの残留孤児との交流を望んでおりました。

私の住む新潟市はハルビン市と交流が深く友好都市となり、私も十年前に親善使節団の一員としてハルビンを訪ねました。その折かねて願って来ました親善の実をあげたいと思いハルビン在住の残留孤児と文通をはじめました。

その方は茨城県の人が身元引受人となって日本に引揚げて来ました。

市長さんが、日本名を岡本恵子とつけて下さって老人ホームに勤務させていただき、家族六人の努力の甲斐あって市の協力もありまして独立した家を建築し、二女は日本人と結婚しまして、長男は大学に進学し、引揚者の中では特に成功した一家となりNHKテレビで全国放映されました。

私はささやかですが日中友好に尽すことが出来、ハルビンで軍務についていた兄の心を慰めることが出来たかと感謝し、仕合わせを感じている今日この頃でございます。（7・8・31）

日本に名乗り出る人も無きと聞く
孤児の一人と文交はし初む
引受けの人等定まり市長より
名も戴きぬ家族六人
長男は定着促進センターの終了式に
表彰受けたり
NHK夜のテレビに写りたり
引揚げ生活成功の家族と
丘陵を拓きし土地に先駆けて
一棟を建て睦みていたり
高校に推薦入学果したる長男は
帰国者の誇りとなれり
土地を求め息子に与ふ住む家は
自ら建てよと父親の愛
縁ありて袴姿の新郎と裲襠姿の
次女の笑顔よ
床を並べ姉妹の如く寝ぬれども
心たかぶり寝ねがてにあり
勤めいる老人ホームの休暇取り
ギョウザを作りもてなしくれぬ
別れむとバスを待ちつつ庭に贈る
紫君子蘭を絵描きて約す

お便りの中から

長崎県　井上　ソヨ

前略御免下さいませ

此の度は会報環礁を何部も御恵送下さいまして誠に有難うございました。

会長様、吉良様の御懇篤な追悼のお文を貴重なスペースに広くお載せいただき、繰り返し拝見、感慨ひとしおでございました。早速亡夫（井上義夫）の仏前に佐藤会長様の御温情、吉良様の御友情を報告して「ゆっくりお読み下さい」と語りかけてお供えいたしました。あとの二部は山城様と同じく十四志の友人で生前の主人が何年か前に同会の会長を引き継いでもらいましたK氏に差し上げたく思っております。

厚くお礼申し上げます。

先日は五十年記念誌「南十字星」を御恵送下さいましてこれも亡夫の仏前に長く供えさせていただいております。

立派なお写真の数十葉、昨年の五十年祭に肉親のみたま安かれと慰霊祭に参加された皆様との集合写真に主人が右端にはっきりと写っておりまして、この一ヶ月後に発見された病気の為に再び皆様にお会い出来なくなるとは、本人もとより家族も全く思いも及ばぬことでございました。

旅行で上京すると必ず靖國神社に参拝し、同行の人たちを遊就館に案内して慰霊副碑の説明をするのが常でございました。マーシャル方面の島々で共に過ごした戦友への切ない思いが尽きないからと申して居りました。

記念誌「南十字星」は私にとって亡夫との思い出のよすがともなります。本当に有難うございました。

吉良様には今迄失礼しておりましたが立派な追悼の言葉をお寄せ下さいまして、有難くお礼状を差し上げるつもりでございます。

日本列島は完全に梅雨が明けたと発表されて以来、刻々温度計は上昇しております。

会長様はじめ皆々様お健やかにお過ごしの程せつにお祈り申し上げます。

尚通信費の一部にでもお当ていただければと、心ばかりを同封させていただきました。僅かでございますがお納め下さいませ。

御英霊の御安泰を祈念申し上げ、長い間の御交誼を故人に代わりお礼申し上げます。有難うございました。

（7・7・27）

ラスベガス　徳原　勇
徳子

佐藤会長様

「環礁」六十三号受け取りました。いつも私共に対する御心づかい有難うございます、いつも楽しく読ませて頂いています。

遺族会の皆様ますます御元気で御活躍の様子、お慶び申し上げます。

ラスベガスの夏の暑さは猛烈なもので、毎日摂氏四十度の暑さが続き、吹く風も熱風で、オーブンの中に入れられた様な感じです。さて、私（徳子）は去る四月乳ガンが発見され、小さな手術を受けました。発見が早かったため入院の必要もなく傷も間もなくふさがりました。そのあと放射線治療に毎日七週間通院し、八月初めようやく医

療から開放されました。ガンは発見が早く適切な治療をすれば完治するそうで、再発の心配はないと医師に言われほっとしています。

徳原の糖尿病もインシュリンの注射を続け食事に注意すれば悪化の心配はないということです。今後は定期的に健康診断を受け、病気の早期発見と治療に心がけます。

日本からの便りをあまり聞くチャンスもなく、日本がますます遠くなった感じですが、「環礁」を手にする度、会員の皆様の近くに引戻される気が致します。

取り敢えず近況のお知らせまで。皆様によろしくお伝え下さい。

Isamu & Tokuko Tokuhara
8342 Drop Camp st.
Las Vegas NV 89123
U.S.A.

クェゼリン　ホール　秋

佐藤様

その後遺族会の皆々様お元気でいらっしゃいますか。

先だってはすばらしい五十年記念誌「南十字星」を送って下さってありがとうございます。毎日気にしつつ今日迄受取った御礼状も出さず申し訳ございません。本当にりっぱに出来ていますこと…大切に保存させて頂きます。ありがとうございました。

さて早速ですけど今日は用件に移らせて頂きます。

此の長年住みなれたなつかしいクワジェリンとお別れする日が目前に迫りました。主人の退職の日が十月三十日ですけど私は、先に（九月三十日）に此所を去ります。ずっと前にハワイのホノルルに住居を求めました。

遺族会の皆々様にはいろいろお世話になりました。佐藤様からどうぞどうぞよろしくお伝え下さいませ。

ハワイに寄られるチャンスがありましたら是非お電話下さいませネ、何時か又お目にかかれる日を楽しみに……

簡単ながら右お知らせ迄

念のため新住所を記しておきます。

（7・8・13）

Aki Hall
3050 Ala Poha Place
W－3 Honolulu, Hawaii
96818 U.S.A.

千葉県　芳賀　タツエ

いつもなにかと会長様はじめ役員の皆様にお世話様になりまして、厚くお礼申し上げます。

四十七年に杉並から転居した当時は長男夫妻と孫男子ばかり三人と六人家族でしたが、孫も社会人となりそれぞれ転勤したりして現在は一人になり、民舞、民謡、カラオケ、ゲートボール、グランドゴルフなどを楽しんでいます。

私は大正六年三月三日生まれで七十八歳になりましたが、皆様に迷惑をかけないように元気で頑張っております。

私も勧めておりましたので、定年になりましたらクェゼリンへ墓参に行きたいと希望しておりましたところ、五十七年七月に誘ってくださった人がありましたので一行六人で出発しましたが、成田に泊った翌日、入域不許可の知らせがあり、相談の結果観光に切り替えることにしました。

私は飛行機は初めてでしたので雲の上に乗っているのがとても気になりました。サイパン、グアム、ロタ島と墓参いたしまして、戦争の傷あとを間近に見て当時を想い心が痛みました。またたく間の八日間が終り帰宅しましたら、厚生省からのマーシャル諸島慰霊巡拝許可のお知らせがきていました。

九月二十八日から十月八日までの十一日間、待望のクェゼリン島墓参が叶えられました。きっと主人が呼んで下さったのだと喜びました。

わが家から持参した水や造花、好物を供えて、手を合せて主人とお話ができた感じがして、本当に良かったと思いました。

（7・8・10）

東京都　蓮沼　常子

今年八月十五日、図らずも遺族会の御推薦によって日本武道館での天皇、皇后両陛下御臨席の全国戦没者追悼式に参列を許され感激しました。

故長兄の軍医松尾元治は、ブラウン環礁エンチャビで昭和十九年二月下旬に一個大隊の将兵と共に享年三十三歳で玉砕し、郷里の八代市光円寺に葬られました。

兄は大正元年八月生まれ。明るい性格で学生の頃は庭球部員で対校試合にもでました。

兄は九州大学医学部を卒業の後、短期現役軍医として陸軍に入隊し、通称満洲第八〇五部隊（独立守備第十六大隊）北満白城子に駐屯してノモンハン戦にも従軍しました。

十八年十一月に海上機動第一旅団第三大隊に改編され一〇三六名はエンチャビ島に上陸しました。当時兄からの軍事郵便には「海、海、海、海」とだけありました。一辺一粁三角形の珊瑚礁の小島で、米軍の空と艦隊からの猛攻撃に、応戦する重火器なく、堅固な地下壕なく、食糧乏しく、応援部隊すらない、悲惨な最後をとげました。

愛知県幡豆町の三ヶ根山頂に部隊の慰霊碑が建てられています。同じ部隊で玉砕された黒部茂雄軍医の夫人文子さんが幡豆町で眼科医を開業しておられ、遺族や部隊の縁故者に呼びかけてその協力で建立して下さいました。同部隊は新潟県出身者が多いそうです。戦没者のお名前を碑の下に納めていただきたいと思っています。

秋田県　近藤　キクヱ

会長様はじめ役員の皆様には大そう行きとどいたお世話をして頂きましてほんとうにありがとうございます。

私は、五十七年十一月にタラワの「南瀛の碑」の除幕式と慰霊祭に参列させて頂きました。会の方々や現地の皆様の温い御協力のおかげで立派な慰霊碑が建てられ、厳粛なおまつりをして頂いて弟へのつとめを果たしたような気がいたしました。

平成五年十一月には、厚生省主催の慰霊団に加えて頂き再びタラワにおまいりができて幸せをいたしました。

二回も墓参が出来まして一生の思い出となりました。

今は、病床で思い出しては涙する事が多くなりました。

「南十字星」を送って頂きましてありがとうございました、「環礁」と共に一生の思い出として又宝として、後世迄も大切に保存して置きたいと思っています。

「環礁」や「南十字星」を見ても、涙で読む事が出来ませんでした。会長様ありがとうございました。

私は、五十年祭に行く事が出来ず申し訳なく思って居ります、お許し下さい。私も一日も早く退院をして来年は靖國神社にお参りしたいと思って居ります。（7・4・1）

埼玉県　藤田　清瀬

会長、役員の皆様、先日の慰霊祭は二百名もの参拝者で英霊もさぞお喜びになられたことと思いました。

一年ぶりでお顔なじみの方々とお逢い出来、お天気も良く、桜も満開で嬉しい楽しい一日でございました。

今年は座骨神経痛がひどく、娘にいっしょに行ってもらいましたが、私だけではなく参拝出来ない方が年毎に多くなる様で淋しく思いました。

五十年記念誌有難うございました。

委員会に毎回出て、皆様の御苦労を目のあたりに見て、この様な立派な本が出来た事、人一倍感激しております。特に年表を拝見しますと、私の生きてきた半生のあかしの様に思えます。大切に致します。（7・5・7）

東京都　星野　綾子

春の足音が大分近づいて参りましたが、いかがおすごしでしょうか。

先日は「南十字星」をお送り下さいましてありがとう御座居ました。

戦死なされた方々や兄への想いをいっそう深くいたしました。

編集に携われた方々にもどうぞ、およろしくお伝え下さいます様に……

わだつみの声なき声や花の散る

お元気ですか？〈2〉

①お元気ですか
②差支えなければお歳は
③ご家族の状況
④心に残る思い出
⑤「環礁」に対するご意見
⑥趣味、おけい古ごとなど
⑦当会へのご要望、その他

千葉県　豊谷　美恵子

今年の猛暑続きには辟易いたしました。大戦の悲劇は遠い昔になって了ったと思いつつも、昨年はクェゼリンに眠る長兄の慰霊供養に、今年は次兄の眠るパプアニューギニアにお詣りいたしました。八月十二日から二十日まで兄と弟と私ども夫婦の四人でウエワクの日本軍総合霊堂で盂蘭盆会供養をしてまいりました。私のパプアニューギニアまいりは十一回になりました。

①おかげさまで元気に消光いたしております。

②私は六十六歳、会友になっている夫は七十四歳です。

③夫と二人暮らしです。

④敗戦後、長兄と次兄の戦死を知らされ、家中が悲憤虚脱の状態になったこと。東部ニューギニアから奇蹟的に生還した夫との出合い。

⑤母が亡くなった後に、母の文庫の中に「環礁」を見つけ、遺族会にお電話をして当時の浮田会長様に入会の手続きをして頂き、それ以来良い御縁ができたことを感謝しております。

⑥慰霊巡拝を生き甲斐としています。

⑦本会のように真摯な運営をしている遺族会は、他にはないと思います。役員の皆様には大変な御苦労がおありと思いますが英霊と遺族のため、会の永年存続のため宜しくお願いいたします。

（追記）

今年八月十五日にニューギニアのブーツ飛行場跡で、集まってきた住民の一人がネックレス替わりに日本軍人の認識票を首にかけていましたので譲りうけてきました。丁度お盆の十五日です。この兵隊さんは私たちに連れられて日本に帰りたかったのではと、涙が止まりませんでした。

いっときも早く御遺族にお渡ししたいと存じますのでお力添えをお願いいたします。

認識票は楕円形ですが撮影の角度で円形に見えます。

刻銘　洋九三〇五　真鍮製
二宮　元巳

群馬県　日向野　キク

①まあ普通。足の骨折と捻挫のために歩くことに困難しています。
②七十九歳と十一ヶ月（八月現在で）
③長男（中学校校長）と妻（主婦）と同居しています。
　孫は男、女一人づつで大学院在学中、二男はテレビ信州の局次長兼製作部長
④昭和六十一年に厚生省主催の現地慰霊巡拝ができたことで、夫の戦死後四十一年目でした。
⑤夫はタラワの南西、赤道の更に南のナウル島で終戦となり、食物は雨水とタロ芋しかないピーズ島で、残務整理中に戦死と聞いていますが、少しでも当時の様子などを知りたいと毎号を待っています。
⑥日本画と水墨画の作成、歌舞伎、能楽、音楽の鑑賞。スケッチ旅行等。
⑦毎回楽しみに読ませて頂いています。会員名簿を見て時々電話でお話させて頂いております。
　慰霊巡拝の時の全員写真がなく、昨年の五十年祭の記念写真も、申込みができなかったので、子孫に伝える物が何もなくて淋しく思っておりましたが、「南十字星」の中に五十年祭の記念写真があって家族と共に喜んでいます。

巡拝の現地日記より

黒潮のタラワの島は閑なり
白緑色に戦跡も消ゆ
訪ねきしナウルの島や海域は
尚遥かなり涙あふれき
様々の苦難を越えて今日ここに
慰霊団の身感謝感激
海と空一つに燃えて夕茜
浄土につづくタラワ環礁

近　況

訪ふ人のゐるやすらぎや初夏の寺
紫の筆おとされし花の文
ひとときの雷雨あがりて天の川
夕立去りツクツク蝉の初音きく
（7・8・28）

千葉県　相川　孝夫

①お陰様で至極元気です。加茂地区遺族会（会員二百三十一名）の会長を務めております。
②昭和三年七月七日出生、六十七歳。
③妻主婦、市役所勤務の長男と母。母は明治二十九年生まれで白寿を迎えました。やや痴呆気味ですが元気。
④平成五年十二月厚生省主催マーシャル方面慰霊巡拝（兄クェゼリン島で戦死）に参加した思い出は生涯忘れることが出来ません。その節の佐藤会長さんより供物のご配慮を深謝いたします。
⑤第六十三号の発行、素晴らしいことです。「継続は力なり」まさに本会の誇れるものです。編集、発行担当の皆様方誠にご苦労様です。
⑥短歌、俳句の創作、旅行、詩吟のおけいこ。
⑦去る四月八日、本会総会の席上で申し上げましたように、私たち遺族や英霊のため役員の皆様方が何かとお骨折りを頂いている事に対して、心より敬意と感謝の意を表するのみでございます。ご自愛の上、本会発展のために益々のご活躍をお願い申し上げます。
（7・8・28）

学校の沿革誌にヒント得て
わが家の歴史今日より綴る
歌詠めばしらさぎ想ゆ富士見ヶ丘
わが師わが友今は如何にと
戦跡の摩文仁ヶ丘を登るごと
慰霊碑増して胸痛むなり
豊かなる実り続けと卒える児に
たらちねの母とみな祈るなり
兄逝きて半世紀の年経たり
新たな悲しみ又よみがえる
棚田なす白き花野に山暮るる
ダムサイド水に月あり灯も映ゆる
旅の宿米寿の宴菊薫る
苦も多し功績も高し白寿の春

福岡県　佐保　明

鎮魂五十年記念誌「南十字星」謹んで心から感激有難く拝受。
①修理しながら大元気。
②生涯現役未だ七十七歳毎日仕事中。
③現在自宅は妻と末娘。
④〈帰途遥か　雁門道の秋の暮れ〉
　昭和二十年の晩秋、捕虜となって北支山西省で聞いた雁の鳴き声。
⑤先立つ資金を準備して時代は変っても、「環礁」の事業は久遠に続けたい悲願。
⑥囲碁（認定三段）マラソン

⑦大分県の友人から上坂冬子さんの「償いは済んでいる」の中に「不戦決議は憲法で決まっている、それよりも戦争犯罪人の汚名返上を決議すべきだ」との熱誠溢れるご意見を同封して来た。

オランダは、三百五十年間の長い期間インドネシアを植民地支配し、世界大戦後のインドネシアの独立宣言を認めず再び派兵して四年間に十万人以上の犠牲を与えた。独立五十周年記念式典の四日後の八月二十一日にオランダ女王が訪問したが十一日間の滞在中に明確な謝罪の言葉はなかった。

生物の戦いは常に勝者の侵略であった。ネール首相の懇請により、カルカッタ大学副総長を辞任して極東国際軍事裁判所判事に就任したカール博士は明確に被告全員の無罪を主張されたのである。侵略の定義が論議されているとき、早々と侵略であったと自虐を宣言するのは如何なものか、真の指導者の出現を冀求するや切なり。

（7・8・25）

宮城県　伊勢　照男

①昭和六十二年秋に「くも膜下出血」等の為約半年間入院。平成五年十二月に「腎腫瘍」の為入院手術、今は毎月一回通院しております。

昨年の五十年祭には入院中の為出席できませんでした。只今は至極元気です。

②大正十五年十月十日生れ、満六十八歳です。

③現在は妻と二人暮し。長男は埼玉県三郷市、次男は東京都大田区、娘は大阪府岸和田市に居り、それぞれ孫が一人おります。

④心に残る思い出としては、昭和二十年三月十三日、大阪の学校に在学中大空襲に遭い生死の間をさまよった時の事。平成五年十二月三日厚生省主催の慰霊巡拝に参加して、ウオッゼ島で戦死（昭和二十年三月三十日）した兄徳樹の霊を親しくお参りできました事。

⑤「環礁」いつも拝読。遺族の心を汲んで編輯されてることに感謝しております。

⑥趣味としては大阪、東京時代から習っていた「小唄」（蓼派）、昨年十一月、東京三越劇場でのおさらい会に出ました。

⑦昭和六十二年に会友の篠崎英夫さんから頂いた「鎮魂ウオッゼ島」、本会の鎮魂五十年記念誌「南十字星」、会友の稲毛三郎さん著「飢餓の島ウ島戦夢物語」などを時々思い出しては拝読して昔を偲んでおります。

千葉県　川名　博夫

①私は昭和十年に衛生兵として佐倉に入隊し、十三年と十七年と二十年の三回召集されました。本年八十一歳になりました毎日を元気で過ごしています。

③家族は妻と長男の三人です。私の兄弟は男五人、女一人でした。戦死した弟は十八年に歩兵として佐倉に入隊しすぐに北支の孫呉に行き、その年の十二月に南洋に出発、十九年二月にブラウンで玉砕しました。

④私は二回目の召集で十七年から十八年にかけて北支に居た時、派遣部隊に伝染病がおこり処理に行った帰路、蘆溝橋で車を下り、昭和十二年の事件を偲び感慨無量でした。小高い丘の一文字山に「牟田口部隊奮戦の地」の碑が建っていました。

一年四ヶ月の任務を終えて帰還の途中山海関から眺めた萬里の長城の雄大な姿が目に残ります。

⑤此の度は素晴らしい記念誌「南十字星」をお送り下さいまして本当に有難う御座いました。会長様をはじめ役員の皆様に厚く御礼申し上げます。

（7・8・28）

東京都　齋藤　耕太郎

①お陰様で元気で過ごして居ります。今年の猛暑にも耐え抜きました。

②年齢も七十六歳となりました。一日の仕事の後の疲れが一年毎に気になります。

③家族は長男夫婦と孫（男）と四人暮しです。

④昭和四十年の秋に護衛艦あまつかぜで霊砂が横須賀に着き、三笠艦内での受渡し式に亡き母と共に参列させて戴いたこと。

⑤「環礁」発行は是非続けて下さい。全国の会員のことがわかりますので。

⑥友人と共に入会した詩吟の会も二十五年になり、上達はしませんが健康の為にも続ける心算です。

⑦会員の多くの方々が各地の島々の慰霊巡拝に行かれましたが、家庭の都合で私はまだ参加出来ません。今後機会がありましたらウオッゼ島へ行き度いと思いますので、その節はよろしくお願い致します。

終りに本部の皆様方の御苦労を感謝し御健勝を祈念いたします。

（7・9・11）

埼玉県　柴田　貞子

①明治以来の猛暑にも負けず元気に過ごして居ります。

②八十六歳です。

③長女は世田谷区深沢で夫婦二人、趣味の山登り、魚釣りとのんびり暮しています。私は、長男夫婦と孫三人の六人家族です。長男は自営業です。孫三人も社会人です。次女は板橋在住。子供は二人で二人共成人しています。次女は、私を良く旅行に連れていってくれます。次男は横浜在住で子供三人です。

④私は四人の子供を一生懸命育てて参りましたが、今は何の心配も無く毎日

を過して居ります。只自分の健康にだけ留意して他人に迷惑を掛けないように過している毎日です。
⑤毎号楽しみに拝見して居ります。
⑥観劇、旅行、読書、カルタ（百人一首）等。
⑦会員御一同様がお元気で御活躍下さいますようお祈りして居ります。

新潟県　斎田　ヨシヱ

①幼時から健康でしたが、五十歳ころ成人病となり今は合併症とならないよう食事、運動療法に励んでいます。
②大正十四年生まれ七十歳。
③家族は夫七十七歳、長男夫婦、孫二人。
④戦後の兄の戦死公報と父母の地元の遺族会活動。
⑤環礁、「南十字星」は英霊の鎮魂とご遺族の親睦に資する最高の記念誌と存じます。記念誌は、霊前に供えました。篤く御礼申し上げます。
⑥病人食の宅配ボランティアを致しております。
⑦現地慰霊に行かれた方から写真を見せていただいたり、お話をお聞きする事を楽しみにいたしております。
　戦後五十年の意義ある年を迎え、風化されることなく平和の礎となられた英霊の鎮魂のために、公民館の前庭に桜を植えさせてもらいたい。実施に向けて遺族の同意を得ている現在です。
（7・9・1）

島根県　園山　和子

この度は五十年記念誌をお送り頂き誠にありがとう御座いました。
　早速拝見致しますと、五十三年八月に会の皆様三十五名の慰霊団に加えて頂き、クェゼリン、サイパンにお詣りした時のことが、昨日のことのように思い出されました。
　夫の戦死したルオットには行かれませんでしたが同じ環礁のクェゼリンの碑に、田舎の水やお茶をお供えし、子供や孫たちを写真で報告しました。この島でも大勢の方々が無念の最後をとげられたことを思いますと身の引き締まる思いが致しました。
　紺碧の海、澄みきった空、平和な島、許されますなら何時までも居たい思いにかられました。
　会長様、役員の皆様、会を何時までも続けて下さいますようお願いいたします。

自歌自註「南十字星」

鎌田　いね子
（黒川　三男命　妹）

最後なる外出許可に兄と母と連
立ちて逗子の浜に遊びき
南国のバナナと砂糖をお土産に
持って還ると約して征きぬ
音羽侯爵以下玉砕と知りてより
母言葉なく座りをりしか
玉砕の報道の後は夢枕に立て来
よと母は夜々祈りゐぬ
「南十字星」を読みてやうやく確
めぬ餓死にはあらず玉砕なりき
遺髪入れし白木の箱を母は抱き
空襲の度に避難したりき
地図に載らぬ小さき島のルオット
へ墓参にゆきぬ弟恋ひの長兄
米軍の造りしルオット島墓苑花
にかこまれ丁重なる管理

　マーシャル方面遺族会の五十年記念誌「南十字星」が長兄（黒川誠）から届きました。それによると、マーシャル群島中のルオット島は、昭和十九年一月三十日から始まった米軍の砲爆撃で、島にあった航空機が全部撃破され、島内貯蔵の魚雷や爆弾、燃料などが誘爆、焼失したとあります。その上、わが守備隊は二月三日十六時に最後の突撃を敢行して玉砕したのだそうです。この中にわたしの次兄がいたのです。母の愛子（まなこ）でした。
　先年ルオット島で慰霊祭があり、長兄が参加しました。墓苑は米軍が管理し、美しい花に囲まれていたそうです。母がいたら何としてでも同行したことだろうと、胸がせまりました。

認識票　遺族へ

千葉県　豊谷　美恵子

　八月二十日ニューギニアから持ち帰った認識票（註・9頁参照）について旧軍関係者に尋ねたり、Y新聞に調査を依頼したりしましたが、手掛りがありません。八月三十日に会に送る原稿の末尾に祈るような気持ちで書き加えましたところ、佐藤会長様の目にとまり、素早く厚生省社会・援護局の担当官に調査を依頼されました結果、十月二十四日、該当者は昭和十九年五月二十日に戦死された岐阜県出身の陸軍軍属二宮元巳命とわかり、御遺族の実弟お二人が奇跡に感動しておられることを知らされました。
　会長様のお取計いで、十月三十日に、御遺族二人と私と主人が靖國神社に参集して御神前に奉告し、清祓いのあと関係者立会いで認識票は五十一年ぶりに肉親の手に還り、弟さん達は、最高の形見を手にして「帰りたい帰りたいの一念が通じたのでしょう。帰りを待ち望んでいた母の墓前に報告します」と感涙に咽んでおられました。この度のことで、会長様、厚生省の担当者、靖國神社の皆様には大そうお世話になりました。

付記
　この件は十月三十一日朝TBSから放映されました。

昭和天皇御製

在位五十年

喜びも　悲しみも皆　国民と
ともに過しきぬ　この五十年を

（昭和五十一年）

【十二月拝殿掲示】

靖國神社だより

秋季例大祭盛大に齋行

―菊花咲き誇るなか―

新たに御祭神十六柱合祀

参道の樹々が美しく色づき始め、色とりどりの大輪の菊花も咲き香る神苑。

靖國神社秋季例大祭が、去る十月十七日から十九日の三日間に亘り厳粛かつ盛大に執り行われた。

大祭初日の十七日夜、第百二十回目の霊璽奉安祭が浄闇の中厳粛に行われ、新たに十六柱の神霊が御本殿正床に奉遷された。また、当日祭には勅使が参向、午後には、皇族方が御参拝遊ばされた。

勅使堤公長掌典参向

祭典は十七日午後三時、大祭奉仕員と神域、諸具を祓い清める「清祓」から始まった。

秋晴れの翌十八日の当日祭は、午前十時に大野宮司以下祭員が御本殿に参進。國學院大學吹奏学部の奏する「国の鎮」と共に、御内陣の御扉が開かれ、和妙・荒妙をはじめ海川山野の神饌五十台が供せられた。

次いで、宮司が祝詞奏上、終りて参列者一同謹んでお迎え申し上げる中、勅使として堤公長掌典参向。御幣物を奉り、大御心のままに御祭文を奏上、玉串を捧げて拝礼の後退下された。

続いて、國學院大學フォイエルコール合唱団による「鎮魂頌」の献楽の後、特別参列者が玉串を奉りて拝礼。その後、宮司は参列者に対し挨拶を申し上げ、祭典は滞りなく終了した。

皇族方御参拝

当日祭の午後一時半、三笠宮同妃両殿下が到着殿に御参着。御少憩の後御揃いで御昇殿、玉串を捧げて拝礼。次いで拝殿にてお迎えの御遺族・崇敬者に親しくお言葉をかけられた。

各界代表並びに御遺族・崇敬者参拝

当日祭には、中井澄子日本遺族会会長代理、古賀誠英霊にこたえる会会長代理、工藤伊豆神社本廳統理代理、原多喜三靖國神社奉賛会会長代理、三輪良雄・大山正・小田村四郎各崇敬者総代をはじめ、各界代表や全国から参集された御遺族・崇敬者六百六十名が拝殿に参列。

第二日祭には、村井慶次郎崇敬者総代をはじめ御遺族・戦友・崇敬者四百八十名が参列した。

（以下割愛）

（社報「靖國」第四八五号より転載）

靖濤

シンガポール在住の奉賛会会員佐々木賢一氏から、『日本人ここにあり』と題された記事を送って戴いた。そこには、一人の御遺族が生命をかけてマッカーサー元帥に直談判し、取払い寸前の靖國神社を救ったという終戦秘話が書かれていた。この秘話は、『靖國を護った男』という題の浪曲にもなっているので、御存知の方もあろう▼次男をニューギニア戦線で亡くした明比忠之氏は、マッカーサー元帥が靖國神社を取り潰す命令を日本政府に下したと聞き、政府に取り止める力がなければ、自分が命をかけて元帥に翻意願おうと決心した。昭和二十年十二月二十三日、皇居前第一生命館の占領軍総司令部に赴き元帥に面会を求めたが、日本政府の紹介もない一民間人に許される訳がない。遂に明比氏は、玄関払いをするM・Pを払いのけ、強引に総司令部に入り込む。制止命令に従わぬ不法侵入者として二発の銃弾を足に受けたが、その騒動により面会がかなう事となる。傷口から流れる血で衣服を真っ赤に染めながら、「靖國神社は、貴方の国でいう無名戦士の墓なのだ」「庶民の父や母、妻や兄弟の心の中に生きている靖國神社を取払えば、占領政策はうまくいかないだろう」と訴える明比氏の言葉は、遂に元帥の心を動かすこととなり、靖國神社は救われた、という話しである▼昭和三十二年、この事が雑誌に掲載された時、神社も事実関係を調べたが、詳細は不明であった。時の政府がなし得なかった事を、一人の御遺族が一命を賭して実行したというこの秘話を、是非とも正確に顕彰したいと思料している。詳しく御存知の方は、神社まで御一報戴きたい▼昭和二十年十二月の秘話を御紹介致し、終戦五十年最後の「靖國」をお届けする。

第五三一海軍航空隊 慰霊碑について

会友　篠崎　英夫
（元五三一空主計長）

呉海軍墓地を訪ねると、主として東側の山腹に各艦船部隊の慰霊碑が林立している。墓地に入り広場の東側（左側）最前列三番目に第五三一海軍航空隊の慰霊碑がある。碑に向って右に「伊勢」左上に「扶桑」近くに「最上」「鈴谷」「阿賀野」そして「大和」が続いている。まことに好位置に小部隊五三一空の碑が大きく、しかし何か控え目に建っている。建立以来二十数年、当時植えた桜の苗木が大きくなり、碑を蔽うようになっている。

第五三一海軍航空隊は、昭和十八年七月最新鋭艦上攻撃機「天山」三十六機をもって館山海軍航空隊内で編成、同年九月北千島方面に展開、さらに南東太平洋方面の戦局緊迫に伴い「マーシャル」諸島「ウオッゼ」島に進出、十二月展開完了。以後「マーシャル」諸島沖航空戦、マキン基地攻撃、翌十九年一月来襲した米機動部隊との戦闘において全搭乗機を失い、搭乗員亦全員戦死。昭和十九年二月解隊。かくて北千島の氷の島の空に、また南太平洋の紺碧の大海原の上に勇戦奮闘、そして全滅。五三一空は七ヶ月余の短い歴史を閉じ、隊員は第四警備隊勤務となった。その後終戦にいたるまで米軍の攻撃と想像を絶する饑餓との闘いのうちに終戦を迎え十一月、萬感の想いを懐きながら迎えの空母「鳳翔」にて故国に帰る。

全戦没者二百六名生存帰還者五十八名。

部隊が小さかっただけにその後ご遺族との連絡はよく、帰還者の団結も強く、毎年慰霊祭を行い、戦没者の鎮魂慰霊に努めた。

戦後二十年を経て、世情漸く旧に復しつつあるとき、隊の戦没者慰霊のため五三一空の慰霊碑建立が議にのぼり、部隊の元司令佐々本健爾氏が中心となり、呉、広島在住の生存隊員の一方ならぬ努力により、昭和四十七年六月十七日、呉海軍墓地の一角に慰霊碑の完成を見た。

なお資金面でもご遺族、生存隊員、更には自衛隊の関係部署、また部隊関係者の方々の心のこもったご協力のあったことは感謝に堪えない。

生存隊員は今や最も若い人でも七十歳に近く、あと十年更に二十年たって碑に参ったとき、碑前の桜がどう茂っているか、そして慰霊碑は何を語るのか。

第五三一海軍航空隊の戦没者、物故者（戦後物故者の分骨が碑の納骨庫に納められている）の霊安かれと祈るのみである。

（平成七年十月）

《写真は1頁にあります》

寄付者芳名

（敬称略・順不同）

次の会員及び会友の皆様は年度会費を完納された上更に慰霊奉賛のため浄財を御寄付下さいました。厚く御礼を申し上げます。

今後とも本会の永年存続のため何分の御協賛を切にお願い申し上げます。

北海道　伊藤　フジ
千葉県　腰川　妙子
東京都　蓮沼　常子
愛知県　望月　靖久　岡島みね子
鳥取県　井上　照美
岡山県　薬師寺理助
徳島県　椎野とみ子
香川県　奥田　和広
福岡県　一瀬クモエ
宮崎県　山口　ミワ
鹿児島県　丸田　キワ
沖縄県　宮城　幸子　玉那覇有賢
篤志会員・会友等　井上　ソヨ
長谷川栄次

以上は平成七年六月一日から十一月三十日までに、寄付された方々十六名で、その合計金額は十万一千円でした。

新刊本の紹介

アベマーマの守備隊長

栗林　徳五郎　著

太平洋戦争時、マキン・タラワの玉砕と同時に、アベマーマという孤島で二十三人の日本海軍陸戦隊員が玉砕した。その兵隊たちの島での悲しく、そしておかしな物語――。

▽定価一九〇〇円（送料込み）
▽お申込みは次に
〒112　東京都文京区小石川
二―二三―一四―三一一
㈶　南洋群島協会
（代金は後払い）

環礁「ミレー抄」（20）

会友　成宮　芳三郎
（第66警備隊軍医長）

大潮のみどりつらなり白砂の
冴えつつ続く島百有余
ひとりぬの侘びしさ今日も堪え難く
身を紛すと書よみてゐぬ
スコールの静まる夜半を月光に
遠き椰子むらひらめき光る
平鯵の一塩かたみに分くる時
へだてなかりき兵と士官と
反照の移らふ浜の一刻に
超低空の米中型機編隊

鎮魂　五十年記念誌

「南十字星」刊行

平成七年二月、五十年祭記念行事の一貫として記念誌を刊行しました。御入用の方に、申込順に在庫限り一部五千円（送料共）でお頒けしております。代金は郵便振替で前納下さい。

A4版68頁　題字は大給相（オギユウ）談役御揮毫

内容は写真記録20頁、戦域の状況11頁

本会のあゆみ17頁、年表10頁ほか。

上製本（濃紺クロス貼　題字金箔押）

名簿訂正 (9)

◎　平成3年8月15日発行の会員名簿を次のとおり訂正いたします。

<頁>	<氏　名>	<訂　正　事　項>
22	小笠原　岩　勝	小笠原一雄が継承　続柄長男
30	森　ゆ　き　江	森清美が継承
33	腰　川　妙　子	☎0476－42－6549を追加
33	津久井　艶　子	☎0473－57－1243に変更
35	大　山　美恵子	〒162 新宿区戸山2－21－114　☎03－3202－2071　戦歿者吉田朝男　続柄妹　所属部隊3133　戦歿年月日19.2.6　戦歿地クェゼリン〈新入会〉
37	斉　藤　孝　平	〒170 豊島区池袋本町4－20－3　☎03－3981－3486　戦歿者斉藤勇作　続柄弟　所属部隊水路部　戦歿年月日19.2.6　戦歿地　クェゼリン〈新入会〉
40	森　田　喜　代	☎0423－75－3131に変更
43	呉　地　一　衛	呉地憲一が継承　続柄甥
43	志　田　富　雄	〒229 相模原市横山3－1－3　☎0427－54－7469　戦歿者志田正八　続柄弟　所属部隊不明　戦歿年月日19.2.6　戦歿地ミレ〈新入会〉
50	青　木　みねを	田川佳夫が継承　続柄長男
51	神　田　　環	〒390－03 松本市惣社1043－10　☎0263－32－6380に変更
53	曽　根　エ　イ	曽根福二が継承　続柄弟
56	大　町　末　子	京都市左京区を右京区に訂正
56	田　村　竜　美	〒600 京都市下京区七条御所内北町21　☎075－311－3289　戦歿者田村一　続柄弟　所属部隊61警　戦歿年月日19.2.6　戦歿地クェゼリン〈新入会〉
56	永　野　　寛	〒603 京都市北区紫野東御所田町33－1－306　☎075－411－1651　戦歿者中島治　続柄弟　所属部隊3138　戦歿年月日19.2.24　戦歿地ブラウン〈新入会〉
62	道　源　ヒ　サ	☎0834－21－7521追加
62	椎　野　とみ子	〒770 徳島市八万町大坪82　☎0886－68－0190　戦歿者岡田正　続柄妻　所属部隊佐鎮7特　戦歿年月日18.11.25　戦歿地タラワ〈新入会〉
67	近　藤　シヅエ	近藤章が継承　続柄長男
68	広　田　ヨシ子	福岡市中央区と☎092－781－1601を追加
74	野　平　ヨ　ネ	☎09972－7－3362を追加
74	山　田　フヂエ	川内市城上町7558－1に変更
75	島　袋　ヒ　デ	所属部隊佐鎮7特を追加
77	川　副　克　己	☎0958－78－3597に変更
80	鈴　木　忠　正	〒276 八千代市八千代台東3－11－6－102号　☎0474－82－4923に変更

（1頁より）

九段会館　宿泊部
〒102　千代田区九段南一－六－五
電話　03－三二六一－五五二一

◎当日は受付け付近の混雑が予想されますので、年会費、寄付、直会参加費、九段会館宿泊料などは、二月中に到着するようお振り込み下さい。当日の受付は、原則として参加者の確認だけにしたいと思います。

◎直会の奉納芸能は、昨年に引きつづき琴正流名倉先生以下の大正琴演奏と、日本舞踊赤城流家元赤城先生以下の皆様の御協賛を頂くことになっております。

靖國神社を崇敬しお護りする
奉賛会に入会しましょう

護国の英霊の鎮ります靖國神社の末永き御安泰のために、御祭神に最も身近かな私どもは全員が奉賛会に入会しましょう

訂正

五十年記念誌「南十字星」の写真の説明の中に誤りがありましたので謹んで訂正いたします。

15頁中の「36頁」を「38頁」に、17頁中の「36頁」を「39頁」に、22頁と23頁中の「37頁」を「39頁」にそれぞれ訂正。

本部だより

☆お便りをお寄せ下さい

この「環礁」を、同じ境遇の仲間たちの心のふれ合いの場としてお気軽に御利用下さい。身の周りのこと、趣味やレクリエーションのこと、この会に対する御要望、御意見などをお寄せ下さい。採否と多少の手直しはあらかじめ御了承下さい。

和歌、俳句、川柳、書道、絵、民謡、謡曲、料理などを勉強、おけい古をしている方、ハイキング、ゲートボール、釣、写真、旅行、園芸、カラオケなどを楽しんでいる方は話題が沢山おありと存じます。作品を提供頂けるものは誌上に紹介したいと思います。

「自分史」を作られた方は、お差支えなければお貸し頂きたく存じます。

〝お元気ですか〟アンケートにも皆様の活発な回答をお待ちいたします。

☆入会のおすすめ

本会は、会費を納めた者を会員として登録し二月と八月に会報「環礁」をお届けしております。

マーシャル諸島とギルバート諸島方面の戦歿者の親族ならば誰でも、又、御一柱に何名でも御入会頂けます。同方面に勤務された戦友の皆様には会友として御参加頂いております。会員、会友とも会費は一ヶ年二千円で入会金は要りません。

謹賀新年

平成八年元旦

◎本会役員及び篤志会員

顧問	栗林徳五郎	監事	佐竹エス
相談役	大給湛子	同	高橋鎮夫
会長	佐藤宗丕	篤志会員	有田年
常任幹事（会計）	黒川誠	同	土屋太郎
同	畫間樂平	同	徳原徳子
幹事	荒木常子	同	並木進
同	石谷典夫	同	長谷川栄次
同	内海淑子	同	長谷川敏
同	高林芳夫	同	松平永芳
同	山口良二	同	山村要

☆会費完納のおねがい

本会の活動に必要な経費はすべて会員と会友の浄財だけで賄われており、他からの補助等は一切ありません。会を長く続けてゆくためには財政の安定が是非とも必要でありますので、会費の完納にご協力下さい。会費を納めない方は退会の申し入れがあったものとして、会員名簿から削除し、「環礁」の発送を中止しますので、事情御賢察の上悪しからず御了承下さい。

訃報

元篤志会員横溝幸四郎様は、平成七年七月十六日、享年七十九歳を以て逝去されました。

横溝様は、元海軍少佐で航空隊勤務が長く、戦後は三十年の長期間厚生省で戦歿者遺族援護業務等を担当し献身的努力をされました。退官のときは援護局業務第二課長でありました。

永年の御奉仕に感謝し、謹んで御冥福をお祈りいたします

本部
〒103　東京都中央区日本橋人形町一－八－二（泉商事ビル）
マーシャル方面遺族会
電話〇三－三六六一－八七六〇
FAX〇三－三六六一－六二四一